

鳥見山遺跡群発掘調査概要報告書

宇陀市文化財調査概要 5

2010

宇陀市教育委員会
宇 陀 市 役 所

鳥見山遺跡群発掘調査概要報告書

宇陀市文化財調査概要 5

2010

宇陀市教育委員会
宇 陀 市 役 所

例　　言

- 1 本書は、平成21（2009）年度に宇陀市教育委員会が実施した「鳥見山遺跡群」の発掘調査概要報告書（宇陀市文化財調査概要 5）である。
- 2 発掘調査（現地調査）は、平成21（2009）年12月 2日に着手し、平成21（2009）年12月 24日に終了した。
- 3 現地調査は、奈良県教育委員会及び奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、宇陀市教育委員会文化財保存課 課長補佐 柳澤一宏が担当した。
- 4 調査組織及び関係者は、「I 埋蔵文化財発掘調査の概要」に掲載している。
- 5 測量図及び遺構図の方位は、国土座標第VI系を基準とする座標北を用いているが、一部には磁北（MN）も使用している。。
- 6 土層の色調は、「新版標準土色帖」2000年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 勤日本色彩研究所色票監修）を参考にしている。
- 7 各遺跡の調査記録、出土遺物等は、宇陀市教育委員会において保管している。
- 8 本書の執筆・編集は柳澤が行った。

目 次

I 位置と環境.....	1
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
II 調査の契機と経過.....	3
1 調査の契機と経過	
2 現地調査日誌抄	
3 調査組織等	
III 調査概要.....	5
第1トレンチ	
第2トレンチ	
第3トレンチ	
第4トレンチ	
第5トレンチ	
IV まとめ.....	8

図 版
抄 錄
報 告 書 抄 錄

I 位置と環境

1 地理的環境

奈良盆地東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では、宇陀市（大字陀区、株原区、菟田野区、室生区）、曾爾村、御杖村からなる。この宇陀地方は、地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」と総称され、宇陀市の西半がこの口宇陀に含まれている。

口宇陀は標高300～400mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や深い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも称されている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの緩い山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。

宇陀郡の四周はほとんどが山に囲まれており、東が三重県へと続く高見山地、西が大和盆地と宇陀とを区切る音羽山、龍門岳などが連なる龍門山地となっている。南は吉野と接し、関戸峠を越えると紀伊半島を東西に走る中央構造帯を流れる吉野川流域へと至る。北は五条から桜井、株原を経て伊賀へと続く近江・伊賀大断層と呼ばれる構造谷が認められる。この構造谷の北側は急傾斜の断層崖となっており、大和高原とを区切る額井岳（通称 大和富士、標高816m）、香醉峰（標高797m）、貝ヶ平山（標高822m）、烏見山（標高740m）などの山々が屏風状に形成され、宇陀の地を見下ろしている。

口宇陀を流れる主要河川は、西から順に宇陀川、芳野川、内牧川があり、これらは小盆地、谷部を蛇行しながら他の小支流をあわせ、宇陀市株原区でさらに広い宇陀川となる。その後、宇陀川は室生川をあわせて北東へと流れ、三重県へ至って名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へとそいでいる。口宇陀の西には龍門山地が横たわるため、これが奈良盆地との分水界となっており、大和川流域とは水系を異にしている。

これらの地形に沿って古くから様々な交通路が発達し、宇陀地方は大和と伊賀、伊勢そして東国とを結ぶ重要な役割を果たしている。現在の主要交通路は、近江・伊賀大断層沿いの桜井市朝倉、初瀬、株原区萩原、山辺三、室生区大野を通る国道165号線や近鉄大阪線となっており、かつては、伊勢街道（初瀬街道）、青越道などと呼ばれた道である。また、口宇陀を縦断するかのように南北にいくつもの主要道が走り、北へとすると株原を通る伊勢街道を横断し、香醉峰を経て奈良市都祁町などが位置する大和高原へと至る。南の関戸峠や佐倉峠を越えると、もうひとつの伊勢街道（高見越）へと通じ、関戸峠を越えた三茶屋から南は東熊野街道にもつながる。

烏見山（標高740m）は、桜井市と宇陀市（株原区）との境界に聳え、ここに報告する岩尾火葬場（隣接地）と烏見山中腹遺跡は、烏見山南側の中腹に位置する。

2 歴史的環境

宇陀地方、なかでも口宇陀地域には縄文時代以降、各所で多くの人々が生活を行い、その痕跡が「遺跡」となって、今の我々に、様々なことを教えてくれる。また、宇陀地方は、「古事記」、「日本

書紀』をはじめとする多くの文献にも度々登場し、今に伝える地名、伝承等も多い。

近江・伊賀大断層と呼ばれる構造谷の北側は急傾斜の断層崖となっており、大和高原とを区切る額井岳、香醉山、貝ヶ平山、鳥見山などの山々が屏風状に並ぶことは先述したところである。これら山々の南斜面には、いくつかの遺跡が点在する(図1)。

鳥見山中腹遺跡は、鳥見山の中腹、標高約580m～620mの山塊斜面に広がる縄文時代～弥生時代の遺物散布地であるが、遺跡の詳細は明らかでない。当地は神武天皇4年条にある「靈時」が当地にあったとされており、かつては神武天皇聖跡として顕彰された地のひとつでもある。



図1 鳥見山遺跡群と周辺遺跡位置図

萩原薬師田遺跡では、中世の遺物包含層から須恵器（杯蓋、杯身、高杯、壺、甕、器台）、土師器（高杯）とともに窯壁片が出土している。この窯壁片には、須恵器杯身片2点、甕体部片、青色のガラス片が溶着している。これらは6世紀初頭と考えられる。12世紀後葉までに尾根が大きく削平されたため、古墳時代の遺構は未確認であるが、宇陀地域における須恵器窯の存在を推定できる資料の出土は注目されるところである。また、北隣の「12-D-8」遺跡は、勾玉等が採集されており、祭祀遺跡と考えられている。

この山塊南斜面から現在の国道165号線にかけての地域で確認されている古墳は、弥生時代後期から古墳時代前期の台状墓（区画墓）のキトラ遺跡、前期末の谷畑古墳、後期の神木坂1号墳、終末期の奥ノ芝1・2号墳、南山古墳、神木坂2号墳、神木坂3号墳、西峰古墳などが知られているが、その数は多くなく、古墳築造にあたっては、何らかの規制があったものと推定できる。当地域の終末期古墳の大半は、磚積石室で構成されており、これら古墳の被葬者は中央官人とも渡来系氏族とも推定されている。

岩尾火葬墓は、1914年（大正3年）、山道で偶然、発見されたものである。2枚の鉄板が露出していたため、さらに掘っていくと多量の木炭と共に包まれた骨蔵器が発見され、壺内には火葬骨が納められていたという。骨蔵器は、須恵器壺に須恵器皿を被せたもので、奈良時代のものである。現在、正確な出土地点（墳墓）については、明らかでないものの、「岩尾火葬墓」として奈良県遺跡地図に登載されているところである。

平安時代の墳墓としては、神木坂古墳群木棺墓SK03があり、草花文八稜鏡、灰釉陶器小壺が出土している。この他、近隣地域の大王山1号地点では瑞花双鳥八稜鏡と鉄製紡錘車、同じく5号地点No3土坑では八稜鏡、ガラス玉、土師器皿、鉄釘などが出土している。また、高山1号墳の周辺からも唐草双鷲八稜鏡が出土している。

周辺の古代寺院（跡）は、戒長寺や香齋寺跡があるが、全容解明は今後の調査に期するところが大きい。

II 調査の契機と経過

1 調査の契機と経過

宇陀の地を見下ろす山のひとつに鳥見山（標高740m）がある。この山の中腹に岩尾火葬墓（奈良時代の火葬墓）と鳥見山中腹遺跡（縄文時代～弥生時代の遺物散布地）が位置する。これら2遺跡から南方への眺望は非常に良く、宇陀市條原区の市街地をはじめ、口宇陀地域が一望できる位置にある。

これらの遺跡群を工事範囲に含めた林道建設工事が計画され、2009年9月には「埋蔵文化財发掘通知」が宇陀市長（事業担当：建設課）から提出された。その後、関係機関等が遺跡の取り扱い・発掘調査等の実施方法等を協議した結果、宇陀市教育委員会において発掘調査を担当することとなった。当委員会は事業主体者と現地確認を重ね、工事予定地内の旧地形の残存状況等を勘案した結果、5箇所にトレンチを設定することとし、その他は工事立会として現地調査を実施することとな

った。現地調査（発掘調査・工事立会）は、2009年12月2日から12月24日までの間、断続的に実施した（図2）。

なお、岩尾火葬墓、鳥見山中腹遺跡の2遺跡を本書では、便宜上、「^と鳥見山遺跡群」と総称しておく。

2 現地調査日誌抄

2009年（平成21年）

- 11月30日（月） 樹木片付け範囲および調査位置の確認。
- 12月2日（水） 第1トレンチ設定し、重機で掘り下げ作業。
- 12月7日（月） 第2～5トレンチを設定し、重機で掘り下げ作業。
- 12月9日（水） 第1トレンチ第3層掘り下げ作業。トレンチ北端で土坑を検出し、掘り下げ・写真撮影。第1トレンチの平板測量。
- 12月10日（木） 第1トレンチ写真撮影、土層断面実測、土坑実測。第3トレンチ～第5トレンチ第2層掘り下げ作業。
- 12月15日（火） 第2トレンチ・第3トレンチ第2層掘り下げ作業。第4トレンチ精査。第5トレンチ精査、写真撮影。
- 12月16日（水） 第2トレンチ第2層掘り下げ作業、写真撮影、平板測量、土層断面実測。第3トレンチ精査。第5トレンチ精査、写真撮影。
- 12月17日（木） 第3トレンチ第3層掘り下げ作業、精査、写真撮影。第4トレンチ中央部分にサブトレンチ設定、第3層掘り下げ作業、精査、写真撮影。第5トレンチ平板測量、写真撮影。
- 12月18日（金） 第3トレンチ・第4トレンチ平板測量、土層断面図作成。
- 12月21日（月） 第5トレンチ上方の踏査。
- 12月24日（木） 第3トレンチ～第5トレンチ周辺の踏査。

3 調査組織等

現地調査及び整理作業等の関係者は、次のとおりである（敬称略）。

事業主体	宇陀市教育委員会
総括	教育長 審多俊幸 事務局長 穴田宗宏 参事 吉村泰和
	文化財保存課 課長 尾上清重
調査・整理	課長補佐 柳澤一宏
調査補助員	芝井祐子、辻本里美、日野原祥子、筒井郁子、松浪智美、太田保美
指導・助言	奈良県教育委員会、奈良県立櫻原考古学研究所、菅谷文則
庶務	宇陀市役所産業建設部（部長 西田茂） 建設課（課長 吉岡博文）

III 調査概要

尾根筋は古くから山道（里道）として利用されており、大きく掘削され、旧地形が残存していない箇所が散見される。このため、旧地形の残存状況が良好な場所において5箇所のトレンチを設定し、その他は工事立会としている（図3）。



図2 鳥見山遺跡群調査地点図

第1トレンチ（図4・6・7、図版1・2）

岩尾火葬墓（隣接地）と推定できる箇所の尾根稜線上に設定した長さ15.5m、幅2.5m～3.5mのトレンチである。基本層序は、第1層がにぶい黄褐色土、第2層が褐色土、第3層が褐色土、第4層が褐色土の地山である。地表から地山面までの深さは約20cm～50cmである。トレンチ北端で径約80cm、深さ約20cmの円形土坑（埋土は暗褐色土）を検出した。第3層中から数点の土師器片（甕）が出土したが、明確な時期は明らかにできない。

第2トレンチ（図4・6、図版3）

鳥見山中腹遺跡に隣接する丘陵斜面に設定した長さ18m、幅2.5m～4.0mのトレンチである。基本層序は、厚い腐葉土層の下は褐色土（第1層）となっており、地表から深さ約20cm～30cmで褐色土の地山面となる。明確な遺構・遺物は認められない。

第3トレンチ（図5・8、図版3）

鳥見山中腹遺跡に隣接する丘陵斜面の緩やかな傾斜地に設定した約5m×4mのトレンチである。基本層序は、第1層が暗褐色土、第2層が黒褐色土、第3層が暗褐色土である。第1層中からチャート片1点が出土している。地表から地山面までの深さは約40cm～70cmである。地山面には凹凸が認められるが、明確な遺構ではないと思われる。

第4トレンチ（図5・6、図版4）

鳥見山中腹遺跡に隣接する丘陵斜面のやや疊んだ所に設定した長さ7.0m、幅3.5m～5.0mのトレンチである。基本層序は、第1層が暗褐色土、第2層が黒褐色土、第3層が暗褐色土である。第2層の黒褐色土が厚く堆積するため、このトレンチは地山面まで完掘せず、トレンチ中央で断ち割り、土層断面の観察を行った。地表から地山面までの深さは約40cm～130cmとなる。緩やかな谷地形を呈する。出土遺物は認められない。

第5トレンチ（図5・6・9、図版4、写真1）

丘陵斜面に設定した幅3.0m、長さ2.5mのトレンチである。第1層が暗褐色土、第2層が暗褐色土、第3層が褐色土である。地表から地山面までの深さは約20cm～30cmである。第2層中から水晶の結晶片1点が出土している。調査範囲が狭隘であるため、明確な遺構は検出していない。

水晶の結晶片は、現存長2.3cm、現存厚約1.0cm（復元推定約1.4cm）の六角柱である。

工事立会地

工事と並行して、その範囲内を適宜、工事立会を行ったが、明確な遺構・遺物は認められなかった。

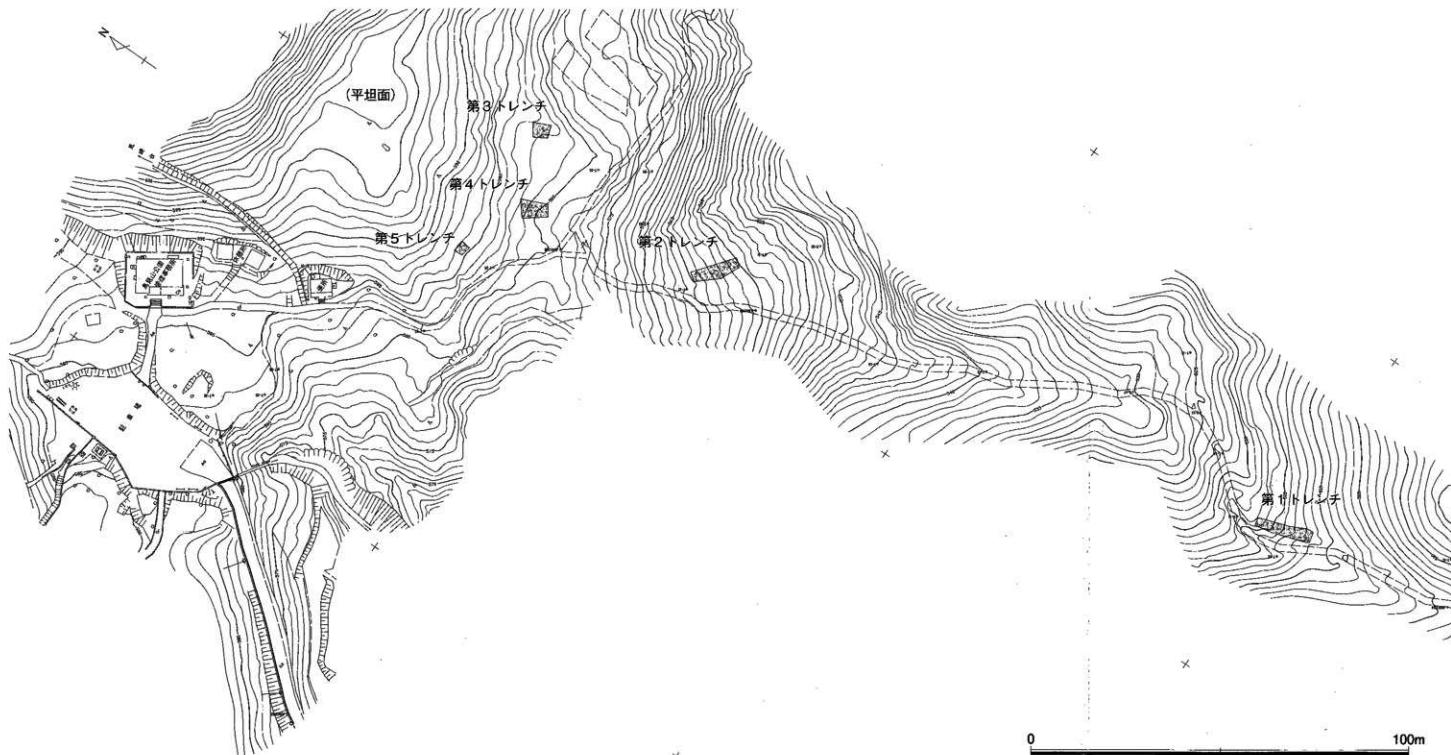


図3 烏見山遺跡群調査位置図

第1トレンド
L=516m
南

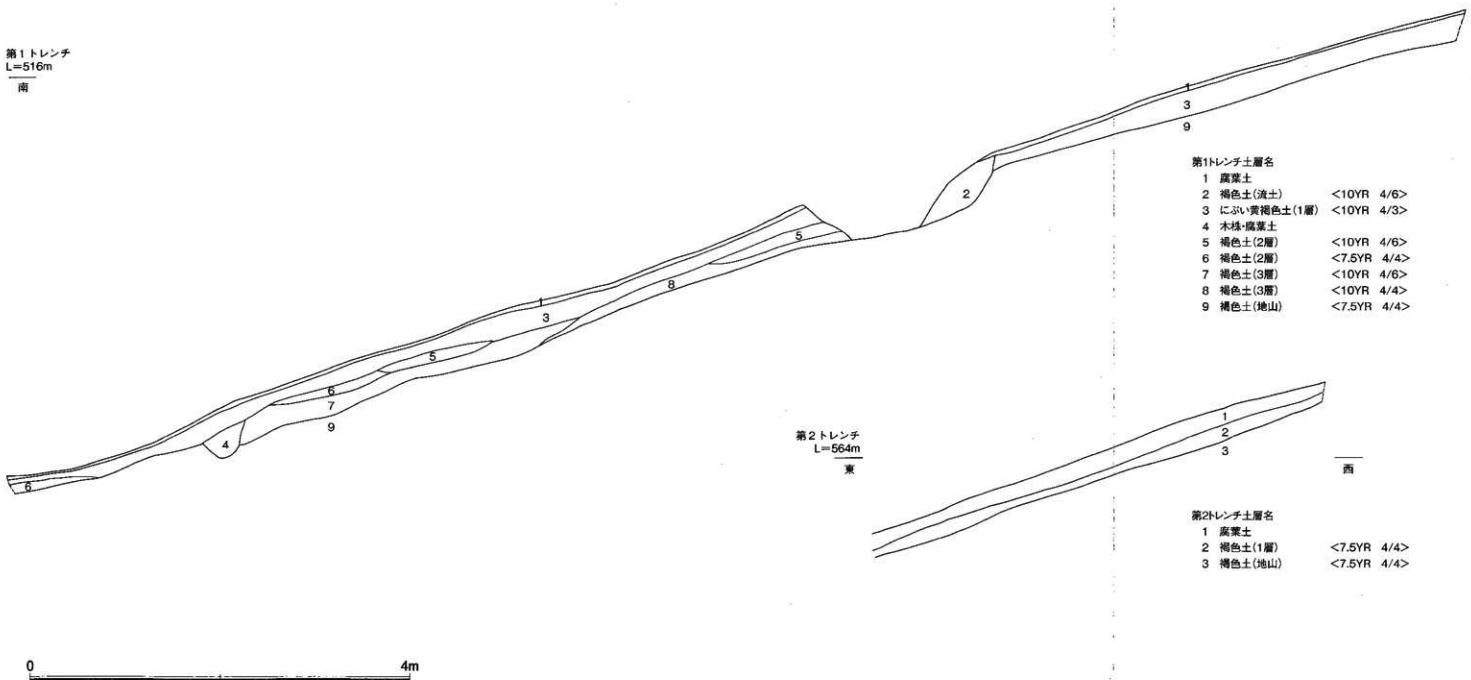


図4 鳥見山遺跡群第1・2トレンド土層断面図

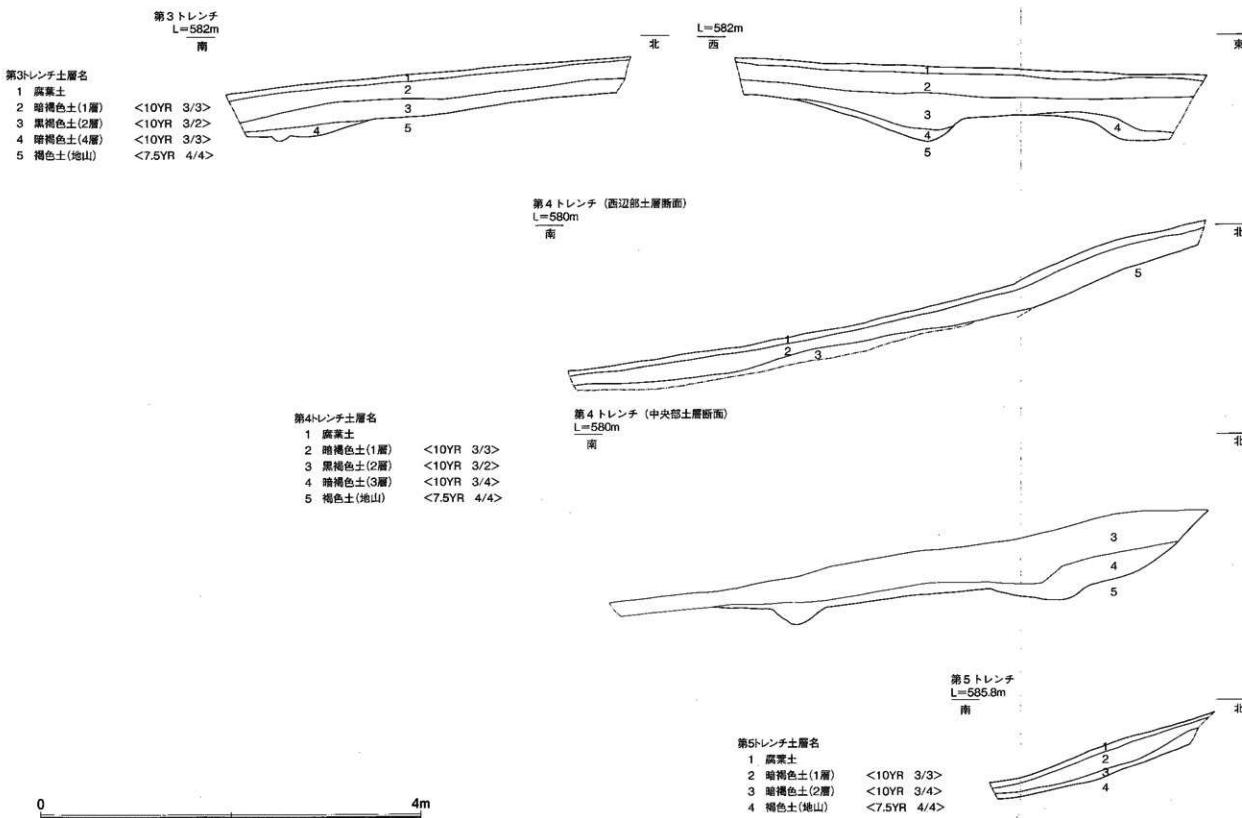


図5 烏見山遺跡群第3～5トレンチ土層断面図

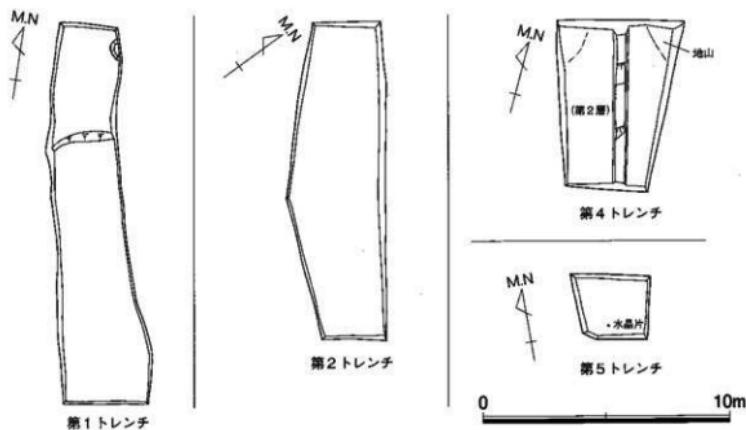


図6 鳥見山遺跡群第1・2・4・5トレンチ平面図

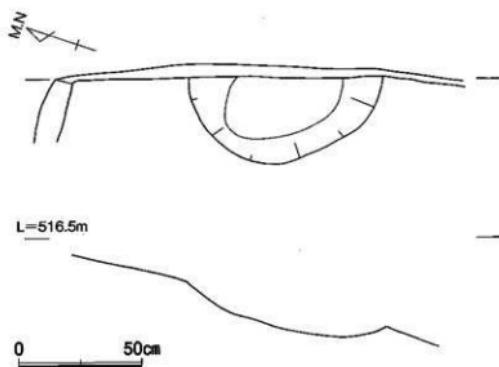


図7 鳥見山遺跡群第1トレンチ土坑実測図

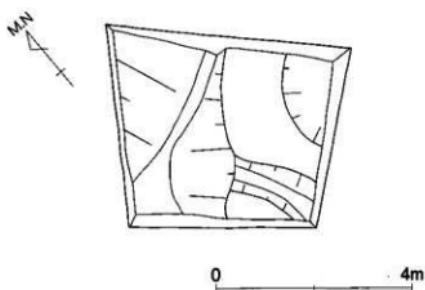


図8 鳥見山遺跡群第3トレンチ平面図

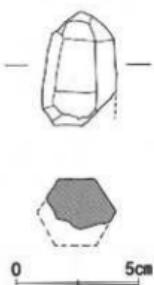


図9 第5トレンチ出土遺物実測図



写真1 第5トレンチ出土水晶片

IV まとめ

今回の発掘調査は、調査範囲が限られていたため、岩尾火葬墓の所在を明らかにすることはできなかったが、尾根稜線上の第1トレンチからは土師器片が出土しており、この周辺に火葬墓があるものと推定される。しかし、墳墓発見からこれまでに山道として利用される間に掘削が大きく進んだと推定される箇所もあるので、現段階では、墳墓の正確な位置・状況は明らかにできない。

尾根斜面の第5トレンチ内からは水晶の結晶片1点が出土しているが、明確な遺構は認められなかった。この水晶の結晶片は、近傍で産する可能性も言われるが、人為的に当地にもたらされたとも推定できる。そうすると、第5トレンチ上方には、南に緩やかに張り出す尾根に平坦面が認められることから、何らかの遺構の想定できるところである（写真2）。想像をたくましくするならば、ここに火葬墓等の遺構の存在も推定できるが、詳細は今後の調査に期するところが大きい。今回の発掘調査によって、鳥見山中腹遺跡は、その範囲が東側へ拡張することが明らかとなった（図2）。



写真2 第5トレンチ上方の平坦面

図 版



第1 トレンチ（南東から）



第1 トレンチ（北から）



第1 トレンチ土坑（西から）



第1 トレンチ土層断面（東から）



第2トレンチ（南東から）



第3トレンチ（西から）



第4 トレンチ（南東から）



第5 トレンチ（南東から）

抄 錄

遺 踪 名	岩尾火葬墓<奈良県遺跡地図番号 12-D-34> 鳥見山中腹遺跡<奈良県遺跡地図番号 12-D-6>
調 査 地	奈良県宇陀市株原区萩原地内
種 別	奈良時代の火葬墓（岩尾火葬墓）
調 査 主 体	縄文時代～弥生時代の遺物散布地（鳥見山中腹遺跡） 宇陀市教育委員会
調 査 担 当 者	宇陀市教育委員会 文化財保存課 課長補佐 柳澤一宏
調 査 原 因	林道建設工事（事業主体：宇陀市）
現地調査期間	2009年（平成21年）12月 2日～2009年（平成21年）12月24日
調 査 面 積	132 m ²
検 出 遺 槽	土坑
出 土 遺 物	土師器、チャート片、水晶片
資料等の保管	宇陀市教育委員会
調査後の措置	工事実施

報告書抄録

ふりがな	とみやまいせきぐんはくつちょうきがいようほうこくしょ							
書名	鳥見山遺跡群発掘調査概要報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宇陀市文化財調査概要							
シリーズ番号	5							
編著者名	柳澤一宏							
編集機関	宇陀市教育委員会文化財保存課							
所在地	〒633-2164 奈良県宇陀市大字宇陀区拾生1846番地 Tel:0745-87-2274							
発行年月日	西暦 2010年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
岩尾火葬墓（隣接地） (2次調査) <第1トレンチ>	奈良県宇陀市樅原区 秋原	292125		34度 32分 31秒	135度 56分 40秒	2009.12.02 ～ 2009.12.10	47	林道建設工事
鳥見山中腹遺跡 (1次調査) <第2～5トレンチ>	奈良県宇陀市樅原区 秋原	292125		34度 32分 38秒	135度 56分 38秒	2009.12.15 ～ 2009.12.24	85	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
岩尾火葬墓（隣接地） (2次調査)	火葬墓	奈良	土坑		土師器			
鳥見山中腹遺跡 (1次調査)	遺物散布地	绳文～弥生	なし		チャート、水晶			

鳥見山遺跡群発掘調査概要報告書

宇陀市文化財調査概要 5

2010年3月31日 発行

編集 宇陀市教育委員会事務局 文化財保存課
奈良県宇陀市大宇陀区拾生1846番地

発行 宇陀市教育委員会
奈良県宇陀市菟田野区松井486番地の1
宇陀市役所
奈良県宇陀市榛原区下井足17番地の3

印刷 株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464番地